

北のクニから ——失意と希望のプーケット

綾部 真雄

アンダマン

夜半にプーケット国際空港に着いた。国際線の到着ロビーを少し過ぎたあたりで、無数に掲げられたウェルカムボードに目を凝らしたが、自分の名前の書かれたボードはついぞみつからない。エーク¹が「友人を迎えに行かせる」と言ったときから予感があったため、失望こそない。人波をかいくぐりターミナルの外に出た途端、ねっとりとした湿度の高い空気が頬を撫でる。はじめて長旅の疲れを感じた。

よく考えてみると、友の友の携帯番号すら知らない。エークに電話をするといつもの快活な声が応じた。まだバンコクにいるらしい。なるべく声に不満を滲ませないようにしながら、迎えに来てくれているはずの友人と会えていないと伝える。「わかりました。すぐに折り返します」と言い、電話番号を書いたテキストメッセージを送ってきてくれた。早速電話をしてみると、「アンダマンの大きな看板の前に車を停めてその中にいる」とややぶっきらぼうに「友人」が言う。アンダマン？すぐに電話を切ろうとする彼を押しとどめ、さらに居場所の詳細を尋ねると、どうやら国内線ターミナルのあたりにいるらしいことが分かった。今いる場所から歩いて10分はかかりそうだ。敢えて「5分でそちらに行く」と言い放ち、すぐに移動を開始した。スーツケースのキャスターが、ざらざらの舗装の上で小さく跳ね踊りながら耳障りな音を立てる。少し歩いて巨大なアンダマンの看板が目飛び込んできたとき、こわばっていた口元がちょっとだけ緩んだ。

¹ 仮名である。なお、本文中のその他の個人名・会社名等の伏字表記については、本来の頭文字とは異なるアルファベットを使用している。



写真 1 アンダマン海を臨む浜辺（2024 年 3 月 4 日、筆者撮影）

恩返し

タイ北部の山にばかり行っていた私が今回プーケットを調査地を選んだのは、もっぱらエークの存在による。もちろん「海域」を念頭に置いてのことだが、エークがプーケットに拠点を構えていなければ、この選択はなかったと思う。タイ屈指のリゾート地であるプーケットは、新型コロナウイルス感染症による大打撃を受けたものの、しばしの沈黙を経て再び活況を呈し始めており、国内外から多くの人と資本が流入する場所として復活を遂げた。数多の事業を手掛けてきた一人のアントレプレナーとして、エークはこの一連の流れを見つめてきた。美しいアンダマン海（写真 1）に面した海域リゾートとしてのプーケットの場所性は、いかにして人々を惹き

つけ、駆り立て、起業を促し、そして時に失意の底に沈ませるのか。このテーマを探求するうえで、エークはどうってつけのコーディネータは他にいない。

一方的に渡航計画を立てたうえで、メッセージ経由で久しぶりに連絡を取ってみると、すぐに返信があった。「ちょうどその期間はタイにいます。長い間、マサオさんに恩返しをする（トープテーン・ブンクン）機会をうかがっていたので嬉しいです」。相変わらずの人たらしである。確かに以前の私とエークとは、友人であると同時に、ある種のパトロンクライアント的な関係にあったとも言える。年齢も一回り下である。幾度となく食事をご馳走し、多少の金銭を融通し、途方に暮れているときには相談に乗り家にも泊めた。

だが、彼の手がけたいいくつかのビジネスが軌道に乗り始めてからは、お互いに目の前の仕事に忙殺され、そう頻繁には会えない時間が続いた。プーケットに大きな一軒家を構えた時にも、いつでも何泊でも泊まりに来てほしいと言われたが、未だに行けていない。今回、せっかくプーケットに行こうと思い立った。この好機を逃す手はない。かくして、南タイに関する経験と知識に乏しい私、タイで長期調査中ではあるものの初めて南タイを訪れる院生、自らがアントレプレナーではあるが初のタイ渡航となる院生の3名による、いささか心もとないプーケット調査行が実現した。

エークのこと、エークとのこと

エークは、タイーミャンマー国境からほど近い、北部タイのチェンライ県のとある町で生まれた。父親の再婚後、継母が彼の面倒をみることを嫌がったため、幼少期からネーン（少年僧）としての出家を余儀なくされ、各地の寺を転々とする。チェンマイのよく知られた古刹に落ち着いてからは、日本人観光客の姿を多く目にするようになり、日本語自体にも関心を持つようになった。日本語練習帳では飽き足らず、実際に観光客に日本語で話しかけるようになってからは、生来の語学能力が瞬く間に開花し、誰もが驚くほど流暢な日本語を操るようになる。と同時に、世俗の垢に触れた彼の心はまだ見ぬ広い世界への憧憬に満ちてしまい、17歳の時点で還俗を選ぶ。

私が彼に出会ったのは還俗の少し前、1993年のことである。チェンマイの老舗書店としてよく知られたスリウォン・ブックセンターで本を物色していると、ネイティブのそれでこそないが非常に巧みな日本語が聞こえてきた。そちらに目をやると、日本人観光客と思しき2人と黄衣をまとった若い僧侶が話しているのが見えた。僧侶を本屋で見かけることは滅多にない。関

心を引かれた私は、タイ語でその僧侶に話しかけた。虚を突かれた彼は、わずかな沈黙ののちに破顔し、「タイ語がお上手ですね」と逆に私のつたないタイ語を褒めてくれた。近くの寺にいるからいつでも遊びに来てほしいとも言った。が、それだけのことはある。私はすぐに彼の存在を忘れた。

雨季に入る少し前の 1994 年のとある日、私はチェンマイ大学のマスコミュニケーション学部が主催する観光ガイド研修の場にいた。許可をもらっての聴講である。講義が終わるとすぐに、体格の良い若い男性が満面の笑みをたたえながら私に近づいてきた。僕を覚えていますかと問われ、覚えていないと素直に答えた。本当に誰だか全く分からない。「本屋で会ったあの時の坊主ですよ」と言われてすぐに記憶が蘇った。「髪が生えてるね」と、間の抜けたリアクションを返したように思う。そして、その瞬間から、彼は少し年の離れた私の良き友人となった。

南の島を目指す

日本語ガイドとしてのエークは実に有能である。北タイの街々を隅々まで知り尽くし、時に日本語の諺を交えながらユーモラスに観光案内を行う彼には、日本の観光代理店からも多くの指名が入った。そのキャリアは順風満帆に見えた。しかし、1997 年のアジア通貨危機を境として、チェンマイの観光業界にも次第に暗雲が垂れ込める。多くのホテルやレストランが営業を止め、日本語ツアー会社もひとつふたつと潰れていった。往時の活気を失ったチェンマイを訪れる日本人の数も目に見えて減り、日本語ツアーガイド業界は飽和状態に陥っていく。需要に比して、ガイドの数が多すぎるのである。エークは、チェンマイでの仕事に早々に見切りをつけて言った。プーケットに行くと。山に囲まれた内陸の盆地でずっと生きてきた彼にとって、南部の島は未知の場所であると同時に、あらゆる可能性に開かれた新天地のように見えていた。

プーケットでは、観光の灯はまだ消えていなかった。本土のパンガー県から海を挟んで 600 メートルほどしか離れていない好立地に恵まれ、海域リゾートとしての高いポテンシャルも併せ持つ（写真 2）。エークは類稀な能力を発揮し、瞬く間に名物日本語ガイドの地位を不動のものにする。観光ボートの舳先に悠然と立ち、日に焼けた精悍な顔立ちで滔々と海の恵みと島々の魅力を語るその姿には、南部人の風格すら漂っている。南部の言葉を自由に操るようになった彼を、現地の人々ですら島の出身者だと勘違いした。それぐらい、プーケットの水は彼に合っていた。

そんなエークを、今度は大きな自然災害が襲った。2004 年 12 月 26 日のスマトラ沖地震と

それに伴うインド洋大津波である。タイだけでも 5,000 人を超える死者を出したこのカストロフィにより、多くの観光客でにぎわっていたパトンビーチは瓦礫とゴミで溢れかえり、映画の舞台としてよく知られたピピ島も壊滅的なダメージを受けた。40 人の日本人が命を落としもした。幸いエークはこの難を辛うじて逃れたものの、観光地としてのプーケットはいったん死んだ。瓦礫の撤去が終わり、満を持してリゾートホテルの再建を進め、復興の灯がともし始めてからも、日本人観光客は戻ってこなかった。



写真 2 プーケット島南西部の入江（2024 年 3 月 4 日、筆者撮影）

ロシアという光明

またもや仕事を失ったエークは、しばしの間途方に暮れた。ほかの国からの観光客が徐々に戻ってくるようになってからも、日本人だけは全くと言ってよいほどやってこない。日本人は

死の匂いが染みついた場所を誰にもまして怖がり、また忌避する。そんなことも囁かれていた。一体いつまで待てばよいのだろう。

単に座して待つのはエークの性分には合わない。彼の出した結論はロシアに行くことだった。現地でロシア語を勉強し、来るべきロシア語ガイドの需要高騰に備えるという。周囲にはそんな彼を嘲笑する者もいたが、世紀の境目頃からロシア人観光客の来訪が目に見えて増えているのは事実である。BRICSの一角をなすロシアがさらに台頭してくる日も遠くないはずだ。しかも、極寒の地に住むロシア人はプーケットの海に憧れにも似た特別な感情を抱いている。エークはすぐにアクションを起こし、一路ロシアへと向かった。

ロシア留学時代のエークの様々なエピソードは実に愉快である。いつかきちんと文章にする機会があればと思うが、ここでは詳細には触れない。大学に付設された語学学校でロシア語を集中的に学んだ彼は、このときもまたその才能をいかんなく発揮した。ロシア語に特有な軟母音と硬母音をも巧みに使い分け、流暢なロシア語を身に着けたエークは、意気揚々と帰国した。しかも、現地で恋仲になった名家出身のベトナム人の恋人まで連れて。当初ベトナムの生家の母親は、“どこの馬の骨とも分からない”タイ人の男なぞにうちの娘はやらないと言っていたものの、娘の本気度とエークの真摯な態度にほだされ、最終的には2人の結婚を認める。

スタートアップ

エークの読みは的中した。2007年前後を境にロシアからプーケットを訪れる観光客の数は増加の一途をたどり、2020年の新型コロナ感染症拡大でいったん落ち込んだものの、2022年以降はV字的な回復を見せる。2023年には、ロシアからの観光客数は中国を抑えて1位になり²、その状況は現在も続いている。事実、私たちの調査中も、観光地や観光施設で見かける欧米系と思しき人々の近くを通り過ぎた際、話されていたのはもっぱらロシア語であった。

エークのロシア語ガイドとしての成功については多言を要すまい。誰よりも早くロシア語を習得した彼は、元来の如才なさにも手伝われ、プーケットにおけるタイ人ロシア語ガイド界の草分けの一人となっていく。彼はさほど間を置かずして、ロシア人向けインバウンド観光に特化した旅行代理店K社を設立する。現在、タイを訪れるロシア人のなかには英語を解す人々も多く、聞き取りにくいロシア語を媒介とした観光ツアーよりは、敢えて英語ツアーへの参加を

² bangkokbiznews（タイ語） <https://www.bangkokbiznews.com/business/1081108> 2024年6月1日閲覧

選択するケースもある。そうしたなか、美しいロシア語を操るエークが行うロシア人向けのツアーとそのアテンド技術は話題を呼ぶ。エークを指名するリピーターが増えたのみならず、ブーケットで高級コンドミニアムを保有する富裕層のロシア人らも、彼を通訳やコーディネーターとして頼りにするようになる。その中の一人が、エークの人生に大きな転機を与えることとなる S 氏である。

当初はクライアントに過ぎなかったロシア人実業家の S 氏は、エークの能力をいち早く見抜き、彼にビジネス・パートナーとして白羽の矢を立てる。S 氏がパートナーを必要としていた背景には、タイ特有の事情も働いていた。現在の外国人事業法（1999 年改正、2000 年 3 月施行）下では、外国人が新規に登録する法人の 50%以上の株式を保有することは認められず、実質的な事業オーナーであっても、タイ人の現地パートナーを探し、同パートナーに 51%以上の株式を保有してもらう必要がある。多くの外国人事業主にとっては、信頼できる現地パートナーを確保できるかどうか、ビジネスの成功をうらなう生命線ともなる。その点において、エークの真摯な人柄と流暢なロシア語は S 氏からの信頼を得るに足る十分なものであった。

かくしてエークは 2010 年、S 氏による出資のもと、半導体を中心商材とするフォワーダー業を営むスタートアップ G 社を設立する。裸一貫で北のクニからやってきた青年は、四十の声を聞かずして、南の島で小さな会社の取締役の座に就任した。

栄光と翳り

エークのビジネスは極めて順調に進んだ。時代の波にも助けられ、半導体を中心としたフライト（貨物）フォワーダー業とドロップシッピング（在庫を持たない E コマース）は多くの顧客を獲得し、会社としての収入も右肩上がりに増えていった。エークはもっぱらインボイスの発行や会計管理を担当し、重要な経営判断は常に S 氏が担っていたとはいえ、彼が 30 人近くのロシア人やタイ人の部下を抱えるスタートアップのトップであることに変わりはない。目に見えて羽振りが良くなった。島の内陸部にある、豪邸と言ってもよい大きな一軒家に家族で移り住んだのもこの頃のことである。私に「泊まりに来てほしい」と言っていた家にほかならない。エークのキャリアはまさに絶頂期を迎えていた。

乱高下を繰り返してきた彼の人生も、この時分には比較的安定していた。東京とバンコクで幾度か会ったが、常に自信に満ち溢れ、バンコクでは高級海鮮料理をふるまってもらったこともある。還俗したての若いエークが住んでいた、雨漏りのする薄暗いアパートの前には、彼の

唯一の財産と言ってもよい黄色いフルカウルバイクが停めてあった。いつもピカピカに磨き上げてあった。くすんだ古いアパートと立派なオートバイという不釣り合いなその絵柄は、いまでも臉の裏に焼き付いている。取締役就任当時の豪華な暮らしぶりをみるにつけ、かつての困窮ぶりがあたかも幻のように思えたものである。

しかし、かなとこ雲のてっぺんがいかにも平らであっても、その両端があるところで虚空にストンと落ちていくように、エークの平らなはずであった絶頂にもやはり端っこがあった。今になって考えてみれば、その予兆は見え隠れしていたのだろう。それに気が付くのが少しだけ遅かった。直接的には、ウクライナ戦争が彼のビジネスに大きな陰を落としていく。半導体という需要の増え続けている製品を中心商材としていたために、新型コロナウイルス感染症による影響は比較的小さかった。だが、ウクライナ戦争で半導体の主要部分を占めるシリコンを製造するための希ガスが大幅に不足し始めたのみならず、ロシア政府の政策変更で、多くのロシア人ビジネスオーナーがキャッシュフローの管理に困難を抱えていくようになる。S氏も例外ではない。ドロップ SHIPPING が中心であるため在庫リスクこそないが、注文があっても届ける商品自体が圧倒的に不足していた。各種の新たな規制により資金を自由に動かすこともできない。プーケットをベースに展開するP社の事業は、ある種の限界を迎えていた。

原点回帰

G社はまだ書類上は解散こそしていないが、その途上にあり、エークは再び仕事を失うことになった。ロシア人相手のインバウンド観光の仕事も多少は受けたが、長年の社長業の後ではあまり身も入らない。そんな状況の彼が選んだのは、いったんプーケットの家を引き払い、家族とともに出身地であるチェンライ県に戻ることに、そして、そこで経営学修士（MBA）を通信教育とスクーリングを併用しながら取得することであった。学業に励んでいるさなか、エークの卓越した日本語能力を知るある筋から、日本を訪れるタイ人アウトバウンドの添乗をしないかという申し入れがあった。彼は迷った。日本人インバウンドのガイド経験こそ豊富だが、仕事としてタイ人を日本にアテンドした経験はない。日本の文化や歴史にそこまで精通しているという自負も自覚もない。さりとて、当面それに勝る仕事もなさそうだ。エークは心を決めた。

富裕層のタイ人を日本でアテンドするのは楽な仕事ではなかった。だが、事前に徹底的に調べ抜いたうえでまだ見ぬ場所を訪れ、土地土地の魅力について語ること自体は性に合っていた。すべての起点となった「日本」という原点に回帰するのも悪くない。新たなオファーがどんど

ん舞い込んでくるなか、エークはバンコクに拠点を構え直すことにする。アウトバウンドの起点がもっぱらバンコクだからである。私が彼にプーケットでの調査のコーディネート打診したのは、まさにそんなタイミングでのことであった。既にプーケットから離れているとは露も知らずに。

再会の余韻

アテンドの合間を縫って、エークは私たちだけのためにプーケットに戻ってきてくれた。6年ぶりの再会は実に喜ばしいものだったが、とんでもない負担をかけてしまったものである。調査の最終日がバンコクでの MBA の学位記授与式の日と重なりそうだといい、その時だけほんのわずかに逡巡の表情を見せた。結局はギリギリまで滞在を延ばしてくれたものの、再会の余韻も冷めやらぬうちに、いつものように爽やかな笑顔を残して去って行った。去り際に、無償でワゴン車を提供し、ずっと運転手役を買って出てくれた「友人」に言及し、「彼にガソリン代だけ払っておいてほしい」と私に耳打ちしたところもエークらしい。ガソリン代という名のもとの心付けのことである。

エークのコーディネーションはいつも完璧である。ポイントをおさえて短時間でプーケットの要所を巡り、まさに私たちが求めているインタビューーを探し出してきてくれた。島南部のラワイビーチの市場（写真 3）では、先住民のモーケーンの売り手から手際よく魚介類を選んで購入し、観光客が目もくれない薄暗い店に持ち込んで捌いてもらっていた。あっという間に目の前に並んだ数々の料理は、滞在中に口にしたい料理のなかでも最も美味なものであった。現役時代の彼が、いかに優秀な観光ガイドであったかを窺わせる。

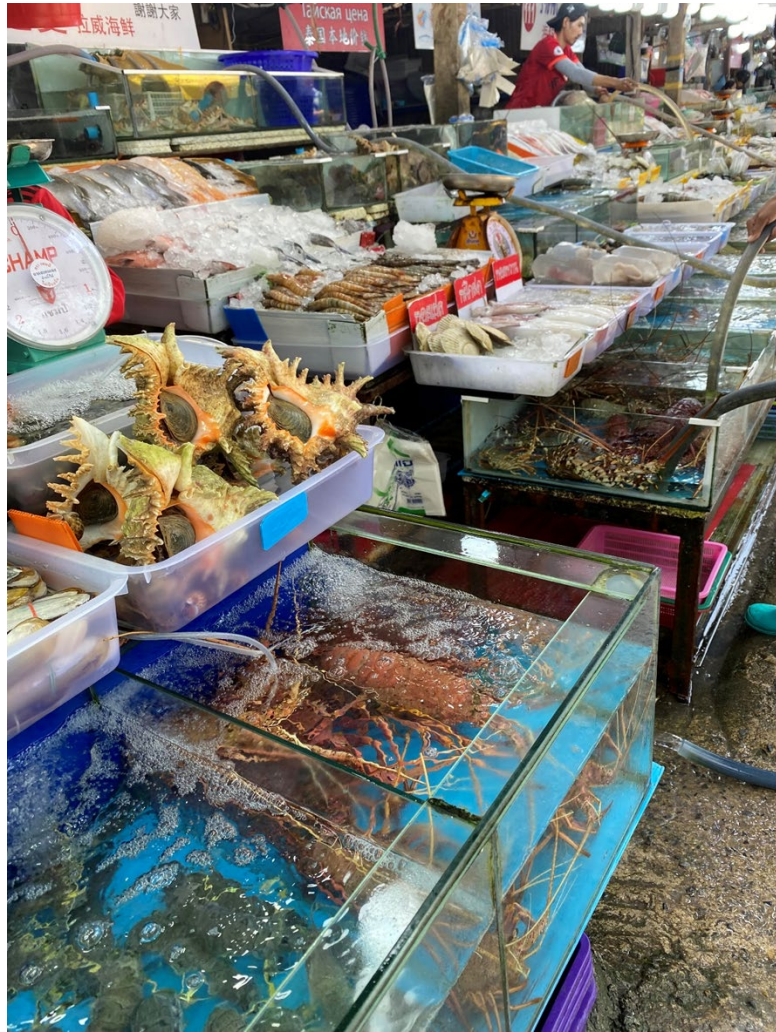


写真3 ラワイビーチ沿いの海鮮市場（2024年3月24日、筆者撮影）

会っていなかった6年の歳月の間に、エークは以前にも増してある種の風格のようなものを身に纏うようになっていた。その一方で、彼の表情の奥に深い疲れが宿っていることにも否応もなく気づかされた。あれだけの経験を経てきたのだから無理もない。尊敬してやまないある僧侶の法話について熱く語るときの饒舌は、むしろ現在の辛苦を裏打ちしているようにも思えた。

北のクニからやってきた元少年僧は、南の島で一国一城の主となってひとときの栄華を享受し、失意とともに島を去った。MBA という新たな勲章は、今後のキャリアにどの程度奏功するのだろうか。プーケットに凱旋する機会はあるのだろうか。だが、エークのなかの希望、そしてアントレプレナーシップが易々と潰えることもまたあり得ない。次への胎動は、おそらくは

彼自身の意識にすら先行して始まっている。

(あやべ・まさお 東京都立大学)